

日本工業経済新聞社主催

東日本大震災視察ツアーに参加して

C E R A 建築構造設計 世良信次

日 時：2011年6月23日 6:00 ~ 20:00

訪問地：仙台市若林地区（港周辺の倉庫、工場）

名取市 関上地区（漁港周辺の被災地）



現地状況

- ・ 3月11日から100日を経て、被災物の集積場が各所に設けられて片付けが進められていました。片付けは、市から地元の建設会社などに発注されて仕分けマニュアルに沿って淡々と進められていました。被災地には、片付けの関係の重機とトラックが行き来しているだけで、人気は全くない状況でした。（添付写真参照）
- ・ 流された建物の残骸は、かなり集積されており、集積場は小高い山となりっています。



・住宅は、ほとんどが基礎だけが残った状態で、上屋の残った建物は1階があたかもピロティー構造のように空洞になっており、まだまだ復旧する様子は見られなかった。1階の損傷には、特徴があり、津波の押し寄せたときに耐えた外壁は、引き水ではがされたような跡が見られた。



・現地は、海拔が低く通りかかった川の水面がほぼ地面と同じぐらいになっており、水田には、大きな水溜りが散在していました。水溜りはあたかも月のクレータのようになっており、液状化と津波がほぼ同時に起こったような跡を残していました。

・残されている船や車両は、あたかも観光用のみせもののようにになっている。



・中国の温家宝首相が視察された小高い山は、記念碑が建てられ、今回の被災者を祭る聖地となっています。被災時にこの山に避難した人は、ほとんどが亡くなったといことで、津波の高さの程度が知られる。



感想

小学校の校舎が残っていて、当時非難建物になった。損傷は少なく、再利用ができると思われるが、同行した方々の一人が、「住居者がいないのに小学校はいらないだろう」といったことが耳に入り、「なるほど」と思うと同時に、もっぱら使用している東上線のふじみ野駅が、野っ原から数年で大きな街になったのを見ていたため「何を言っているんだ、街に戻すに1年あれば十分でしょう。」と抵抗したくなりました。



・最後に、今回の地震の巨大な加速度と被害の程度は比例しなかったことに疑問を感じていましたが、現地を見て感じたことは、巨大な加速度を受けたと同時に地盤が広範囲に塑性化し、建物には加速度が伝達しなかったものと思われる。仙台市街は、海岸から5～6km内陸にあり、海岸から市街までの地盤が大きく塑性化したため表層波の加速度が著しく低下し、被害が少なかったと思われる。市内でも大きな加速度が観測されたのは、観測地点が良好な地盤が多いため、深部からの伝達を拾ったとも思われます。記録の裏づけはありませんが、ある意味で、良好な地盤に立つ建物が大きな加速度を受けたのではないかと想定しています。以上、取り急ぎ速報まで、